

9-7 大規模建築現場での土木工事を一手に引受ける

1. 立場と仕事

建設会社に入社して17年目に、敷地造成・伐採を含む複数の建屋建設を7JVで建設する大規模建築現場において、唯一の土木工事が含まれる建設会社統括JVの副所長(土木担当)として工事全体の土木工事を担当した。なお、他の6JVは建築・プラント系のみを担当し、所属していた統括JVの所長も建築系であった。着手後半年は土木工事のみで敷地造成を進めていたが、敷地造成が完了した箇所から順次建築工事との競合作業となっていた。

2. 遭遇した事態

当該工事は、山間部に大規模某施設を建設するもので、土木工事としては立木伐採、敷地造成、工事用進入道路・外周道路設置、排水調整池・排水工など、7JVすべての工事進捗に関わるものが含まれていた。最盛期には2,000人を超える作業員が従事するため、アクセス手段の確保(駐車場・進入路確保、大型車の通行確保)も急務であり、当初は町中まで何キロにもわたる渋滞を引き起こし地元には大きな迷惑をかけてしまった。大規模かつ一から始める工事にしては、工期は2年と極めて短工期であった。

上記の通りボトルネックは土木工事が握っていたにも係わらず、建築工事がメインであったため、他JVを含めて土木系技術者はおらず当初は孤立無援であった。さらに、建築分野と土木分野の施工管理の進め方で違う部分が多く、これまでの経験が活かせずに工程管理が極めて困難であった。建築がメインの現場は初めてであったが、建築系の作業員は入れ替わりが多く、当時はトラブルを起こす作業員もいて、いかにルールを守らせて安全を確保し、全体を円滑に進めるかについて苦慮していた。

3. 対応内容とその結果

工事開始当初は、唯一の土木担当者に対して各JVからの要望が殺到して混乱した。まずは建築の文化に慣れること、さらには定例会等を通じて全てのステークホルダーと情報を共有することに努めた。工事全体を俯瞰し早い段階からリーダーシップをとって、駐車場の確保、そこからの歩行動線、資機材搬入ルートを決めて例外なしに徹底して捌いた。建築文化を理解しつつ、ボトルネックである駐車場・進入路を掌握して全体最適化を図った。その結果、所属する建築所長だけでなく、他社JVとも良好な関係を築くことができた。また、他JVからも様々な相談を受けるまでになり、工事を円滑に進めることができた。

安全面では、ベテラン建築所長の現場運営方針がとても参考になった。その所長は、「①声を出す、②挨拶する、③ラジオ体操をする、の3つができれば皆言うことを聞く」という方針を掲げていた。こんな大規模現場が3つのルールだけでうまく運営できるものかと懐疑的な気持ちであった。建築所長は常に現場を巡回し、気軽に作業員に声をかける気さくな人柄で作業員から好かれていた。ある日、年配の作業員が挨拶をしないと見るや、厳しい態度で指導を行っている姿を目の当たりにした。その時、現場の雰囲気が一変する様子を見て、人を統率するにはリーダーの一貫した姿勢や指導力が重要であることを改めて認識した。様々な課題を克服し、無事故・無災害で工期内に工事を完成させることができた。